

「ソウダ」と「ッテ」「ンダッテ」

—「伝聞」と「引用」の接点と分岐点—

蓮沼昭子（姫路獨協大学・創価大学 名誉教授）
hasunuma415@gmail.com

【要約】

加藤（2010）は「伝聞情報表示用法」の「ッテ」「ンダッテ」を「ソウダ」と「同様のもの」と説明するが、それが必ずしも当てはまらない場合がある。すなわち、発言引用の性質を色濃くもつ「伝言取次ぎ用法」の「ッテ」では「ソウダ」への置換が成立しにくいという現象の存在である。本稿は「伝聞」と「引用」は別のカテゴリーに属すと想定し、上記3形式の位置づけを試みるものである。結論は、「ソウダ」は「伝聞」に固定、「ッテ」は引用寄りに位置するのに対し、「ンダッテ」は「伝聞」と「引用」の境界を跨いで使用されるというものである。複合辞化した「ンダッテ」は「伝聞」を表示するのに対し、ノダ文の引用である「ンダ+ッテ」の「ッテ」は「引用」標識であり、「ソウダ」と互換性をもつのは前者の場合であることを指摘する。

1. はじめに

日本語の伝聞を表す類義形式として「ソウダ」と「ッテ」「ンダッテ」が取り上げられることが多い。後者2形式は前者の口語的代替形として使用されるとの指摘を行い、「伝聞」と「引用」の連続性に対する仮説が提起されているが（小西 2011: 175）¹、これら3形式は単なる文体的変種には収まらない派生の歴史や用法の相違をもつ。すなわち、伝聞「ソウダ」は、外見や様子を表す漢語の「相」と判定詞「ダ」が結びつき伝聞用法を派生させたものと考えられており、証拠性（evidentiality）の分類において「伝聞」（Hearsay; Reportatives）に位置づけられるものである。一方「ッテ」は、引用「ト」の類義的な形式として、証拠性とは別カテゴリーの「引用」（Quotatives）に位置づける立場がある（Narrog and Yang 2018）²。

本稿も、Narrog and Yang（2018）と同様に、引用に由来する「ッテ」と伝聞「ソウダ」は、本来異なる機能を基底にもつと考えているが、その一方で、「ッテ」「ンダッテ」が伝聞「ソウダ」に限りなく接近する現象の存在も観察される。これらが「伝聞」との機能的接近を見せるのはどのような場合か、そして異質性を示しそれが分岐する地点はどこかという疑問に対し、その追究に取り組む研究は未開拓な段階にある。

¹ 小西（2011）は、「って」と「んだって」の差異に対する分析が未着手の段階であることを考慮し、「ッテ」「ンダッテ」を一括して[(ンダ)ッテ]というレンマ（辞書の見出し語にあたる）表記で示している。本稿はこれら2形式は異なる機能をもつと考え、「ッテ」「ンダッテ」に分け、レンマを「カタカナ」、出現形を「ひらがな」で表記することにする。例えば「ソウダ」は、「そうだ」と「そうです」という出現形、およびそれぞれの活用形を代表する形式である。

² 加藤（2010: 229-230）は、「ッテ」の語源について、①格助詞「ト」と接続助詞「テ」の複合した「トテ」を語源とする説、②「と言って」を語源とする説、の二説を挙げ、はっきりしたことは不明としている。

「ンダッテ」は「ノダ」と「ッテ」が結びつき、伝聞を標示する複合辞としての文法的位置を確立しているように見えるが、これと「ソウダ」との対応関係や「ッテ」との相違点などに対しては、ほとんど分析が及んでいない状況である。本稿が課題としてこの問題の分析に取り組む最大の理由はここにある。

以下での考察では、引用の「ト」「ッテ」に対し極めて精緻な分析を行っている加藤（2010）の「ッテ」「ンダッテ」の用法分類を手掛かりに、これら2形式と伝聞「ソウダ」の置換関係の検討を通し、上記の課題解明のための一歩を踏み出すことにしたい。

本稿の構成は次の通りである。2節では先行研究の整理を行い本稿の課題を提示する。3節では「ソウダ」「ッテ」「ンダッテ」の形態的対応関係の整理を行う。4節では本稿がデータとして選択したシナリオで使用された「ソウダ」「ッテ」「ンダッテ」の用例のうち、加藤（2010）の「伝言取次ぎ用法」と「伝聞情報表示用法」の例を取り上げ、その差異と「ソウダ」との互換性の観察を行う。5節では全体をまとめ、今後の課題を述べる。

2. 先行研究と本稿の課題

この節では、伝聞・引用をめぐる主要な先行研究の論点を整理し、本稿の課題を提示する。先行研究を、1)伝聞の「ソウダ」の用法特性を指摘した研究、2)「ッテ」「ンダッテ」の多様な用法を取り上げた研究、の2種に分け、それぞれの主張のエッセンスを紹介する。なお、「ソウダ」と「(ンダ)ッテ」の違いに対し、量的・質的調査に基づく実証的研究として小西（2011）があるが、その紹介、および結論の妥当性に対する検討は、紙幅の制約により別稿で論じることにする。

2. 1 伝聞「ソウダ」の用法特性

伝聞「ソウダ」の用法特性を指摘した主要な先行研究としては、寺村（1984）、中畠（1992）、仁田（1992）、森山（1995）、中俣（2014）、Narrog & Yang（2018）などがある。また、「ソウダ」の使用制限に言及したアカデミック・ライティングの教材として、鎌田・仁科（2014）、伊集院・高野（2020）がある。これらの研究での指摘を箇条書きで以下に整理しておく。

1. 外見を表す漢語の名詞「相」と「ダ」が結びつき、助動詞化したもの。連用形接続の「様態」((シ)ソウダ)と、終止形接続の「伝聞」((スル)ソウダ)の2用法への分化が見られる(Narrog & Yang 2018)。
2. 形式自体が過去形、否定形をもたず、疑問化されないなど、「真正モダリティ」の「ダロウ」に類似した統語的特性をもつ(寺村 1984 など)。
3. 伝聞内容は、発話の現場に依存する度合いの低いもの、すなわち知識扱いきる情報しか取り上げることができない。そのため命令文、意志・勧誘文、遂行文などとは共起しない(中畠 1992、森山 1995 など)。
4. 「対話性」をもち、独り言では用いにくい(仁田 1992、森山 1995 など)。
5. 相手に価値ある情報を伝えようとするもの(寺村 1984)。普通体よりも丁寧体の「そうです」で使用される比率が高く、親しくはない人に対して、「耳寄りな情報」を伝聞の形で紹介するような場合によく使用される(中俣 2014)。
6. 話し手の独立した判断を表さず、他者の判断を表すため、「判断のキャンセル」が可能

である（仁田 1992、森山 1995）。

例）A氏が県知事に立候補するそうだが、本当かな？（伝聞情報の事実性をキャンセル）

7. 基本的に「わからないこと」に関して、一応、仮に事実として受け取っておき、その情報を利用するということを表す（森山 1995）。
8. アカデミック・ライティングでは、「ソウダ」の許容度が低下し、代わりに「～によれば、～である」「～という」「～と述べている」など、情報源の明示や引用標識の使用が推奨される（鎌田・仁科 2014、伊集院・高野 2020）。

2. 2 「ッテ」「ンダッテ」「ダッテ」の文末用法の分類

「ッテ」「ンダッテ」「ダッテ」の文末用法を取り上げた先行研究としては、堀口（1995）、山崎（1996）、三枝（1997；2015）、許（1999）、岩男（2003；2005）、加藤（2010）などがある。「ダッテ」は他の2形式と明確に異なる用法をもっているため、本稿では考察の対象外とするが、以下ではこれを含め、3形式の文末用法に対する先行研究の用法分類の対応関係を整理しておきたい。

表1は、「ッテ」「ンダッテ」「ダッテ」に対し最も精緻な分析と用法分類を試みている加藤（2010）の分類を土台にすえ、これと山崎（1996）、三枝（1997）、許（1999）、岩男（2003；2005）の分類の対応関係を整理したものである³。太枠で囲んだ部分が本稿の考察対象とする用法である。

表1 先行研究における文末の「ッテ・ンダッテ・ダッテ」の用法分類とその対応関係

形式	用法	山崎（1996）	三枝（1997） ⁴	許（1999）	岩男（2003；2005）	加藤（2010）
ッテ	①					伝言取次ぎ用法
	②	伝聞（伝達）	伝聞	第三者の話を伝える	伝聞的用法	伝聞情報表示用法
	③	伝聞（確認） 事実確認・疑問詞との共起	聞き返し・確認	問い返し		伝聞情報表示用法（肯否確認・補充要求）
	④		訴えかけ	相手の話に反発する	押し付け用法	言明用法
	⑤			話し手の考えの 説明提示	表出的用法	
	⑥	意外・驚き			知識未定着用法	理解困難表示用法／意外感表示用法

³ 加藤（2010）は話し言葉における「ト・ッテ・（ッ）ト」といった引用標識を最も包括的に取り上げた研究で、これらを5つに大分類したあと、さらに15の用法に細分類しその詳細について分析を行っている。

⁴ 三枝（2015）では、三枝（1997）の記述を簡略化し整理が行われているが、「問い返し」から「疑い」へと用法名の変更なども見られる。また、挙げられている例文が、加藤（2010）の分類と対応するか否かの判断が困難な場合があるため、表における三枝の用法の位置づけは、蓮沼の解釈に基づくものである。

ンダッテ	⑦	伝聞（伝達）	伝聞	聞いた話に関連付けた状況説明	伝聞的用法	伝聞情報表示用法
	⑧	伝聞（確認） 事実確認・疑問詞との共起		聞いた話の確認		伝聞情報表示用法（肯否確認・補充要求）
	⑨			自分の意見を主張する	押し付け用法	言明用法
ダッテ	⑩	情報源の発話をそのまま提示	言いつけ			忠実再現的伝言取次ぎ用法
	⑪		問い返し			

以下では、加藤（2010）と岩男（2003；2005）の用法分類を参照しながら、本稿が対象とする各用法に属する先行研究の代表例を挙げ、その特徴を解説しておく。（ ）内は例文の出典元となった研究とその該当ページである。

【ッテ】

① 伝言取次ぎ用法

母 [娘に向かって] パパもトマトほしいッテ。(加藤 2010: 138 「家族会話」)

② 伝聞情報標示用法

[新聞を見ながら] 「明日、晴れるッテ」(加藤 2010: 142。守時 1994 の例からの引用)

③ 伝聞情報表示用法（肯否確認・補充要求）

<肯否確認>

司馬の声「アメリカ帰りだッテ？」⁵

沢子の声「石川先生？」(山崎 1996: 9 「振り返ればやつがいる」)

<補充要求>

浩「はい、木村です」

講師「えっ、どこだッテ？」(山崎 1966: 14 「コンビニエンス・ジャック」)

【ンダッテ】

⑦ 伝聞情報表示用法

[結婚前にゲストの夫がゲストの親に挨拶しようとした時の話]

ゲスト：あの、こう彼がしようと、この日だと決めた時あったんだッテ。

司会 1：ほう (加藤 2010: 148 「うたばん」)

⑧ 伝聞情報表示用法（肯否確認・補充要求）

<肯否確認>

泉「高校の時、悪かったんだッテね、竜さん」

⁵ 山崎 (1996) の「アメリカ帰りだッテ？」という下線表記を、本稿の「ッテ」の接続に対する捉え方に基づき変更している。具体的な形態の対応関係に対する考え方については表 3、表 4 を参照されたい。

⁶ 山崎 (1996) の「どこだッテ」という下線表記を、注 5 と同様の理由で変更している。

竜介「えっ、そんなこと話したんか、姉ちゃん。(後略)」(山崎 1996: 10 「男はつらいよ」)
 <補充要求>

黒柳：(前略) 徳川夢声さん、何とおっしゃったんですって? (山崎 1996: 13 「徹子の部屋」)

まず表 1 全体を見渡して指摘できることは、「ッテ」類がもつ用法の多様さである。すなわち「ッテ」類には、「ッテ」「ンダッテ」「ダッテ」があり、これらは形態の区別に応じた異なる用法をもち、「伝聞情報表示用法」はその一部を占めるに過ぎない。一方、伝聞「ソウダ」は、当該情報が他の情報元から得られたものであることをマークする伝聞標識としての使用が基本であり、異なる用法の派生といった現象は観察されない。

「ッテ」の①②③、「ンダッテ」の⑦⑧、「ダッテ」の⑩の各用法については、加藤 (2010) に要を得た整理が示されているので、それを表 2 として再録し、それぞれの相違を解説しておこう⁷。

表 2 「伝聞」に関連する用法⁸と引用標識を含む形式との対応

	伝言取次ぎ	伝聞情報表示	忠実再現的 伝言取次ぎ
ッテ	○	○	
ンダッテ・ンダト		○	
ダッテ・ダト			○

(加藤 2010: 151 表 8.1 を改変)

表 2 は、「伝聞」に関連する用法をもつ引用標識である「ッテ」「ンダッテ・ンダト」「ダッテ・ダト」に対し、形式と用法の対応関係を整理したものである。

本稿が分析対象とするのは、「伝言取次ぎ」の「ッテ」、および「伝聞情報表示」の「ッテ」「ンダッテ」であるが、実際にデータでの使用例の分類を試みようとする、それぞれは連続性を持ち、峻別は容易でないということを経験する。以下ではその判断基準を求め、各用法に対する加藤の説明を確認しておくことにしよう。

まず、本稿が対象外とする「忠実再現的伝言取次ぎ用法」は、「ダッテ」が使用される場合で、形式自体が他と異なる場合である。音声言語では、第三者が行った発言内容ばかりでなく、発言の様態 (声音、話し方、動作など) までを忠実に再現するもので⁹、「当該の情報が話し手にとっても注目に値するものであることを聞き手に示しながら、聞き手に意味ある情報として取り次ぐもの」(p. 145) とされる。非難・侮蔑・反感といった否定的評価ばかりでなく、喜び、共感と

⁷ 加藤の元の表の「忠実再現的伝言取次ぎ」の列を中央から右に、行を最下段に移動しレイアウトに変更を加えたものである。「ダッテ・ダト」を「忠実再現的伝言取次ぎ」という用法名によって特立させ、その特徴に対する定義・解説を行っている点は加藤の卓見であり注目に値する。なお、山崎 (1996)、三枝 (1997) にも「ダッテ」のこの用法に対する言及があるが、加藤ほど明示的な説明は示されていない。

⁸ 表 2 の用法名で使用されている「伝言」と「伝聞」という用語の違いに対する加藤の説明を紹介しておく。「伝言取次ぎ」と「伝聞情報表示」の違いだが、前者では、伝言内容の発信者である第三者が、文脈で明らかかな場合を除き、ガ格で明示されるのに対し、後者ではその必要がなく、不特定の第三者の発言や噂、新聞などの文字媒体に書かれた言語情報などでもよいという相違がある。それぞれをパラフレーズすれば、前者は「～が～と言っている」、後者は「私は Q (引用部) と聞いた」(p. 142。下線の付加は蓮沼) のような言い換えが可能だとされている。

⁹ 書記言語の例では、発言を示す「 」や、発言と「ダッテ」の間にポーズを示す記号 (…) などの使用により、他の用法との峻別が比較的容易である。

いった話し手の心的態度が表されるという特徴をもつ。この点が、次の「伝言取次ぎ用法」との相違点である。

「伝言取次ぎ用法」は、「ッテ」が使用される場合で、第三者の発話内容を「聞き手にとって意味のあるものとして伝達する」(p. 140) 話し手の意図を表すもので、文脈から発信者が分かる場合を除いては、発信者が主格補語のガ格で明示され、しかもそれは3人称に限られるとされる。

最後の「伝聞情報表示用法」は、「ッテ」「ンダッテ」が使用される場合である。情報源を特に明示する必要のない第三者からの情報を引用するもので、「何らかの情報を「自分以外の情報源から得た情報として」、自分の立場から聞き手に伝達するもの」(p. 141) とされる。そしてこの用法の「ンダッテ」と「ッテ」に対し、加藤は「同じもの」(p. 148) との説明を与えており、その相違に対する言及は特に見当たらない。

さらに加藤の分析では、伝聞情報表示用法の「ッテ」と伝聞の「ソウダ」に対しても、「同様のもの」(p. 155) との位置づけがなされており、加藤の説明から本稿の疑問に対する解答を得ることは難しい。一方、本稿は「ッテ」と「ソウダ」の伝聞用法には本質的な相違が存在するという想定に立ち、その接点と分岐点の境界の確定を最終的な課題とするものである。だが、この課題に取り組む前に解決しておかなければならない課題がある。具体的には以下の通りである。これらの課題に対し用例に即した分析は、4節で行う予定である。

[本稿の課題]

1. 表2において「ッテ」は「伝言取次ぎ用法」と「伝聞情報表示用法」をもつとされるが、その違いは何か。
2. 「伝聞情報表示用法」の「ッテ」と「ンダッテ」の違いは何か。
3. 「伝言取次ぎ用法」の「ッテ」、「伝聞情報表示用法」の「ッテ」「ンダッテ」に対する「ソウダ」による置換の可否には、どのような傾向が認められるか。

3. 「ソウダ」「ッテ」「ンダッテ」の形態的対応関係

4節での用例分析に先立ち、この節では文末で使用される「ソウダ」「ッテ」「ンダッテ」の形態的対応関係を整理しておきたい。例文が対象例なのか、対象例の場合はどの用法に該当するのかといった点について、判定基準を明示しておく必要があるからである。

「ソウダ」と「ッテ」「ンダッテ」の文末用法の形態的対応関係は表3の通りである。「んだって」「んですって」は、すでに複合辞化した文末形式となっていると考えられるため、表では「ッテ」とは別建てにし、「ンダッテ」の下に分類してある。

表3 「ソウダ」と「ッテ」「ンダッテ」の形態的対応関係

前接述語の形態	基調となる文体	ソウダ	ッテ	ンダッテ
無標形	普通体	普通体+そうだ	普通体+って	
	丁寧体	普通体+そうです	丁寧体+って	
ノダ形	普通体	{の/ん} だそうだ		んだって
	丁寧体	{の/ん} だそうです		んですって

次の表4は、表3の対応関係を前接する述語品詞別に具体例で示したものである。「明日は雪が降る」「明日は寒い」「明日は雪だ」という伝聞内容を伝える場合を想定しての作例である。動詞とイ形容詞の丁寧体に「って」が続く例はやや不自然だが（?でそれを示す）、「名詞+ですって」は伝聞表現として自然であり、一定数の使用例の存在も確認可能なものである。

表4 「ソウダ」と「ッテ」「ンダッテ」の前接述語の品詞別接続形態の対応関係

ソウダ・ノダソウダ				
前接述語	～ソウダ(普通体)	～ノダソウダ(普通体)	～ソウダ(丁寧体)	～ノダソウダ(丁寧体)
動詞	雪が降るそうだ	雪が降るんだそうだ	雪が降るそうです	雪が降るんだそうです
イ形容詞	寒いそうだ	寒いんだそうだ	寒いそうです	寒いんだそうです
名詞	雪だそうだ	雪なんだそうだ	雪だそうです	雪なんだそうです
動詞	雪が降るって	雪が降るんだって	?雪が降りますって	雪が降るんですって
イ形容詞	寒いって	寒いんだって	?寒いですって	寒いんですって
名詞	雪だって	雪なんだって	雪ですって	雪なんですって
前接述語	普通体+ッテ	～ンダッテ(普通体)	丁寧体+ッテ	～ンダッテ(丁寧体)
ッテ・ンダッテ				

以上はあくまでも作例に基づく対応関係だが、データに現われた「ッテ」の例を観察すると、文末用法に限定した場合でも多機能性・多義性を示し、用法の認定には文脈の読み込みが不可欠で、限られた時間での分析には限界がある。一方「ンダッテ」の例の場合は、比較的容易に伝聞の解釈が成り立つ。また、「雪だって」「雪ですって」のように、名詞述語の無標形に「って」が続く場合は、比較的 naturally 伝聞の解釈が成立する傾向が指摘できる¹⁰。

「ノダ」は命題を名詞化する働きをもつものだが、こうした「ノダ」の働きと、名詞述語がもつ名詞性の間には、何らかの共通の機能の存在が示唆される。一方、興味深いことに、ナ形容詞の語幹(=形容名詞)に「ッテ」が続く場合は、「言明用法」に大きく傾くという現象が観察される¹¹。詳しい分析は今後の課題になるが、ここではこうした現象の存在に注目しておきたい。

伝聞・引用の「ソウダ」「ッテ」の分析で追究すべき課題は、「ノダ」の果たしている機能の位

¹⁰ BCCWJを対象に、句点で終わる「(ノダ)ソウダ。」「ンダッテ。」「ッテ。」に前接する述語品詞の述べ立て形の分布状況を観察したところ、「(ノダ)ソウダ。」「ンダッテ。」では、その分布によく似た傾向が観察された。動詞述語(70%前後)、名詞述語(15~20%程度)、イ形容詞述語(5~10%程度)、ナ形容詞述語(2~3%強)の順で、動詞述語の比率が最も高い。「ッテ。」の場合もその順序は変わらないが、普通体に限った場合、動詞述語の比率が50%程度に下がり、残りの3種類の述語品詞の占める比率が数%~10%程度上昇していることが観察された。こうした現象が生じる理由の分析は今後の課題である。

¹¹ BCCWJで「形状詞」(形容名詞、ナ形容詞の語幹に該当)を「って」が受ける例を観察すると、「大丈夫」「だめ」「無理」など、評価的意味をもつ語が使用された例が目立つ。しかもそのほとんどが話し手の主張を強調する「言明用法」での使用である。例えば「そんなこと信じちゃだめだって！」は「信じてはいけないと言っているのだ」という話し手の強い禁止の意図を表す。形状詞を「って」が受けた例で、「伝聞用法」のものは非常に少ない。一方、「んだって」が「だめ」を受けた以下の例では、伝聞用法の解釈(=「だめなんだそうだ」)が自然に成立する。

(i) あのね、坂本の鬼ばばってね、病気なんだって。もうすぐ死ぬんだって。手術なんかしてもだめなんだって。(PB29_00054 16130 小池真理子『夢のかたみ』)

置づけである。言い換えれば、この問題は「ソウダ」「ソウダッテ」における「ソダ」は、元の情報発信者に帰属するのか、それとも情報の受け取り手かつ伝達者である話し手に帰属するのか、それともその両方か、という疑問に解答を与えることにほかならない。

4. ドラマのシナリオのセリフに見られる伝聞表現の分析

この節ではドラマのシナリオから本稿が収集した伝聞表現の例を挙げながら、各形式の用法特性の観察と分析を行う。それに取り掛かる前に、本稿の分析方法と使用データを以下の2点にまとめて示しておく。

- ① 日常的やり取りで使用された音声言語の「ソウダ」および文末の「ッテ」「ソウダッテ」の例を分析し、その特徴を明らかにする。
- ② データとして、テレビドラマ「Dr. コトー診療所 2006」¹²（全11話）の電子書籍版のシナリオ、およびその録画データを用い、その中で伝聞表示に使用された「ソウダ」「ッテ」「ソウダッテ」の例を観察する。

以下では「ッテ」の「伝聞取次ぎ用法」と「伝聞情報表示用法」（4.1）、および「ソウダ」と「ッテ」「ソウダッテ」の互換性（4.2）に分け、用例の分析と解説を行う¹³。

4. 1 「ッテ」の「伝言取次ぎ用法」と「伝聞情報表示用法」¹⁴

ここでの観察対象は、「ッテ」の「伝言取次ぎ用法」と「伝聞情報表示用法」である。加藤（2010）によれば、この2つの違いは、前者は文脈で明らかなる場合を除き、3人称の主格補語がガ格で示されるのに対し、後者ではその必要がないという点である¹⁵。

まず「伝言取次ぎ用法」に該当する例から観察しておこう。この用法の「ッテ」は、「部長が部屋まで来てくれッテ」「田中さんがいっしょに行こうッテ」のように、行為指示や意志・勧誘表現にも後接可能だが、「ソウダ」との相違が問題になるのは平叙文に限られるため、以下では平叙文の例に的を絞り観察を行うことにしたい。ガ格の3人称主語を波線の下線で、伝言内容を二重下線で示す。

- (1) 彩 佳「ミナちゃん、さちおじがゴハン食べたいッテ!」
ミ ナ「え?」
彩 佳「今、そう言ったの。おいしいものが食べたいッテ」（第2話 p.125）
- (2) 夏 美「校長先生が、彩佳ねえちゃん送ってから入学式にしたいッテ」（第2話 p.141）
- (3) 桃 子「兄ちゃん! 父ちゃんと母ちゃんが話があるッテ!」
信 一 [慌てて猥褻な本を隠し]「入るときはノックしろよノック!」（第4話 p.224）

¹² 架空の「志木那島」という離島を舞台にしたドラマだが、ロケは与那国島で行われており、沖縄が舞台であることが連想される。ドラマのセリフは基本的に共通語、あるいは西日本方言が少し混ざった共通語が使用されているが、沖縄方言は使用されていない。

¹³ なお、表2で本稿の考察対象とした用法のうち、③と⑧は「ッテ」「ソウダッテ」が疑問表現で使用される場合だが、この節の分析対象は平叙文に限定しているため、③⑧に該当する用例の分析は割愛し、続編で改めて取り上げることにしたい。

¹⁴ 本稿の4節以降の分析では、加藤（2010）の「伝聞情報表示用法」に該当すると判断される例の用法名として、「伝聞表示用法」「伝聞表示」など、短縮した呼称を使用することがある。

¹⁵ 注8でも指摘したことだが、パラフレーズした場合、前者は「AがBにQと言っていた」等に置換可能なのに対し、後者は「私はQと聞いた」等に置換可能とされる（加藤2010:195表10.2）。

(1)～(3)は、3人称主語の「さちおじ」「校長先生」「父ちゃんと母ちゃん」がガ格で示され、その発言の取次ぎが文末の「って」で表された例である。(1)を例にとれば「さちおじがゴハン食べたいと言っている」のような言い換えが可能だが、これは他の2例でも同様である。(1)の2番目の彩佳の発言では、発言動詞の「言った」が前置され、「AはBにQと／って言う」という「発言引用の基本形」(加藤2010:24)がそのまま使用されており、「伝言取次ぎ用法」と引用構文の構造的類似性が示唆される。

次に「伝聞情報表示用法」の「ッテ」の例を観察しよう。加藤(2010)によれば、この用法は情報元を特に明示する必要のない第三者からの情報を引用するもので、「ソウダ」と同じ働きを果たすと説明されている。一方、本稿の観察によれば、「伝聞情報表示用法」の「ソウダ」と「ッテ」は、情報元の明示の有無に関わらず成立する用法と考えられるため、以下では情報元が特定されない「ッテ」の例、および特定が可能であっても明示されていない「ッテ」の例を観察しておきたい。

次の(4)～(6)は、情報元が不特定で明示されない例である。

- (4) 正 — 「おーい！ 受かった！ 受かったッテよ～！！」(第1話 p.15)
- (5) 剛 洋「ウン。あ。それとね！ 入学式は4月7日だッテ」(第2話 p.110)
- (6) ゆかり「来週、また点滴だッテ」(第8話 p.437)

(4)は、離島で育った剛洋が東京の難関中学に合格したというニュースを伝えるもの、(5)は、合格した中学の入学式の日取りの連絡を受けた剛洋が、それを父親に報告する発話、(6)は、診療所での自分に対する治療の予定について、診療所の誰かからゆかりが知らされた情報を報告する発話である。

次の(7)は情報元が明らかだが明示されない例で、「昨日、誘い出されて海に行って、鼻血を出した」という情報は、母親の小百合が娘のひなから直接伝えられた情報である。(8)は、前文でコトー先生に対する言及があり、省略されてはいるが、コトー先生が情報元であることが明らかである。

- (7) 小百合「そうよ。昨日も誘い出されて海に行って、鼻血を出したッテ。どうして何もしてくれなかったの！」(第3話 p.165)
- (8) 剛 洋「コトー先生が、今、手術してくれてる。腸を切るけど、悪いところをとれば大丈夫だッテ」(第6話 p.343)

ここで「伝言取次ぎ用法」と「伝聞情報表示用法」の本質的な相違に対する本稿の捉え方について説明しておきたい。本稿では、それを伝達様式、および伝聞内容や伝達意図の質的相違という点に求めたい。すなわち、「伝言取次ぎ用法」の「ッテ」は、情報元の話者から直接聞いた話の内容を伝達者の話し手が聞き手に取り次ぐ場合の用法で、元話者の行為指示や要望に対する対応等、何らかの反応が聞き手に期待される場合の用法と捉えることが可能である。したがって、見かけ上は平叙文であっても、単なる情報・知識の伝達を意図するものとは質的に異なるものといえる。このことを上の(1)を例にとり解説しておきたい。

(1)は、元土建屋の親方の左千夫という老人の家が火事になり、火傷を負い入院中なのだが、拒否し続けていた食事をとりたいたいという左千夫の発言を直接聞いた看護師の彩佳が、もう一人の看護師のミナに取り次いでいるものである。ここでの「さちおじがゴハン食べたいって」は、単なる情報内容の伝達にとどまらず「ゴハンを用意してほしい／用意してくれ」という事態実現への

願望や、それに対する看護師の対応への期待を伝達する発話として理解可能である。(2)(3)も同様で、それぞれ「入学式は後にしてもいい」「用事があるから来い」といった校長先生の許可や両親の命令を聞いた話し手が、伝言の受け取り手である聞き手にそれを取り次ぎ、対応を求める発言と捉えることが可能である。

つまり「伝言取次ぎ用法」とは、元の話者の発話を直接聞いた話し手がその用件を取り次ぎ、その受け取り手に対し適切な対応を求める場合に使用されるものであるのに対し、「伝聞情報表示用法」の「ソウダ」は、客観的事実や知識をめぐる伝聞情報の伝達を専ら担うもので、この点が「伝言取次ぎ」の「ッテ」との違いといえそうである¹⁶。

この問題については、次節で「ソウダ」と「ッテ」「ンダッテ」の互換性を検討する際に、再度取り上げることにしたい。

4. 2 「ソウダ」と「ッテ」「ンダッテ」の互換性

この節では4節の考察のまとめとして、「ッテ」「ンダッテ」から「ソウダ」への置換(4.2.1)、および、「ノダ」の前接の成否に関与する要因(4.2.2)、の2点について検討を行う。

4. 2. 1 「ッテ」「ンダッテ」から「ソウダ」への置換

「ソウダ」は基本的に「伝聞表示」に用法が固定されているのに対し、「ッテ」「ンダッテ」の用法は多岐にわたる。したがって「ッテ」「ンダッテ」が「(ノダ)ソウダ」と互換性をもつのは、これらが「伝聞表示」に用いられた場合であるという想定が一応は成り立つ。以下ではこうした想定に基づき、「ソウダ」との互換性が認められない(にくい)「伝聞」との関連性をもつ「ッテ」「ンダッテ」の例を観察し、その理由を考えておきたい。なお、「そうだ」「って」「んだって」「んですって」の選択には、「発話キャラクタ」¹⁷(定延2020)の関与が大きいと考えるが、これに基づく用例の検討は続編で行うことにし、ここでは「ッテ」から「ソウダ」への置換の成否を決める要因に限定して分析と解説を行っておきたい。

まず「伝言取次ぎ用法」の「ッテ」から「ソウダ」への置換の成否だが、結論を先取りして述べると、置換後の例は総じて不自然で置換は成立しにくいといえる。

以下に挙げる例は「伝言取次ぎ用法」の「って」の例として挙げた(1)~(3)の「って」を「そうよ」「そうだ」に言い換えたものである。一見、問題はなさそうに思われるが、発話意図を考慮すると、いずれも語用論的に不適切・不自然と判断される例である(#でそれを示す)。

¹⁶ 中島(1992: 20)が指摘する以下の(i)(ii)での「ソウダ」の容認度の対照性は、(i)の「悪かった」が謝罪を意図する遂行文であるのに対し、(ii)の「悪かった」は事実を記述する事実確認文であるという相違により説明可能ではないかと思われる。

(i) ?田中さんは(自分が)悪かったそうです。(遂行文=「すまない/すみません」〈謝罪〉)

(ii) 田中さんは数学の点が悪かったそうです。(事実確認文)

¹⁷ 定延(2020)は「キャラ3」を「病理的な事情なしに、状況に応じて非意図的に変わる人間の部分」(p. 60)という概念で捉え、《在来》タイプの「発話キャラクタ」に対し、以下の①~④の「尺度」、およびその代表的な「値」(:の右側に示されたもの)に基づく分類枠組みを提示している(p. 226)。

① 品:[上品]~無指定~[下品]

② 格:[別格]~[格高]~無指定~[格低]

③ 性:[男]~無指定~[女]

④ 年:[老人]~[年輩]~無指定~[若者]~[幼児]

- (1) 彩佳 # 「ミナちゃん、さちおじがゴハン食べたいそうよ」
 (2) 夏美 # 「校長先生が、彩佳ねえちゃん送ってから入学式にしていいそうよ」
 (3) 信一 # 「父ちゃんと母ちゃんが話があるそうだよ」

上記の例が不自然となる第1の原因は、それぞれの話者はいずれもこの場面で「そうよ」「そうだ」を使用しそうにないキャラクタの人物であり、こうした親しい間柄の人たちのくだけた会話では「って」「んだって」が使用されるのが普通だからである。しかし、不自然さの原因はそれだけではない。すなわち、「ソウダ」は「伝言取次ぎ用法」の用法特性にそぐわない性質をもつものだからである。

4.1節でも指摘した通り、「伝言取次ぎ用法」の「ッテ」は、元の話者が伝言の受け取り手に対し、何らかの対応を期待する場合に使用されるものなのに対し、「伝聞表示用法」の「ッテ」「ソウダ」は知識扱いできる情報の伝達を専ら担うものである。加藤(2010)によれば、「伝言取次ぎ用法」は「ッテ」のみがもつものに対し、「伝聞情報表示用法」は「ッテ」「ンダッテ」「ソウダ」のどれかがもつとされる。そのため「ッテ」の「伝言取次ぎ用法」と「伝聞情報表示用法」の峻別は、時として非常に困難になることがある。以下ではこの問題に対し非常に示唆的な振る舞いを示す2例を挙げ、この問題に対する解答を試みることにしたい。

次の(9)は、胃癌を宣告され診療所で絶望の淵にいるゆかりと夫の坂野孝の会話である。この夫婦には幼い娘の千賀(推定年齢3歳)がいるのだが、その娘が絶望の淵にいる母親を励まそうと自らの決意を述べた発言を聞いた坂野が、それを聞いていない妻のゆかりに取り次いでいる場面である。

- (9) [千賀はゆかりの横で眠ってしまっている]
 ゆかり「ねえ、チカの話ってなんだったの」
 坂野「え」
 ゆかり「さっき言った」
 坂野「ああ……。コイツ、急に言い出したんだ。お前に……。大きくなったら絵本
 を読んでやるんだって」
 ゆかり [驚いて]「……」
 坂野「大きくなって、字が読めるようになったら、読んでやりたいんだって」

(第7話 p.409)

(9)では「って」が2度使用されているが、これを使用した坂野の2つの発話は、「伝言取次ぎ用法」に位置づけることが可能だと思われる。すなわち「コイツ、大きくなったらお前に絵本を読んで {やる/やりたい} んだって言い出したんだ」¹⁸のような文に言い換えが可能で、これは「AはBにQと/って言う」という「発言引用の基本形」(加藤2010:24)に該当するものである。

さて、ここで(9)の「んだって」の構造に対し注意を喚起しておきたい。すなわち、ここでの「んだって」は複合辞化した伝聞標識の「ンダッテ」ではなく、元発話の文末の「んだ」に引用標識

18 「コイツ」は無助詞で提示されているが、「コイツが～と言い出したんだ」のように、主格のガを補うことが可能であり、「伝言取次ぎ用法」の要件を満たしているといえる。千賀の元発話としては「チカ、字が読めるようになったらお母さんに絵本を読んであげるの」のようなものが想定できるが、坂野の発話ではダイクシスの調整が行われており、引用文の類型としては「間接引用」に位置づけることが可能である。なお、この場合の千賀の決意表明の発話を「伝言取次ぎ」と呼ぶのはやや不自然であり、「発言の取次ぎ」などと呼ぶ方が適切かもしれない。

の「って」が後接した構造のもので、「絵本を読んで{やる／やりたい} んだ+って (言っていた)」のような構造に分析可能なものである。そしてこの場合の「んだ」は、複数ある「ノダ」のもつ表現効果のうち、《決意》《告白》(吉田 1988) にそれぞれ位置づけることが可能だと思われる¹⁹。

興味深いことに、ドラマのシナリオには、(9)と非常に類似した、次の(10)のような例がある。(9)の翌日の場面で、ゆかりが医師のコトーに一日でも長く生かして千賀のそばにいさせてほしいと懇願する場面での発言である。

(10) ゆかり 「チカ私に、絵本を読んでくれるんだって」

コトー 「……」

ゆかり 「あの子が大きくなって、字が読めるようになったら。私に読んでくれるんだって」 (第7話 p. 420)

(10)は夫の坂野を通してゆかりが間接的に聞いた千賀の発言をコトーに伝えるもので、ここで使用された「んだって」は伝聞表示用法に該当すると考えられる。(9)とは対照的に、(10)では「ソウダ」への置換が相対的に自然だと判断できることがその根拠の1つである。(9)(10)の「って」「んだって」を「ソウダ」に言い換えた例を以下に示し、この点を確認しておこう。置換に使用した形式を／の後に片仮名表記で示す。

(9)' 坂 野 「コイツ、大きくなったらお前に絵本を読んでやるんだって／??ソウダ」

(伝言取次ぎ)

(10)' ゆかり 「チカ私に、絵本を読んでくれるんだって／ンダソウヨ」 (伝聞表示)

判断が微妙になるケースだが、(9)'では「ソウダ」への置換はかなり不自然で容認しがたいのに対し、(10)'の「ンダソウヨ」は、(発話キャラクタを捨象すれば)容認可能ではないかと思われる。

(9)'と(10)'は、「伝言取次ぎ」「伝聞表示」という用法の相違に加え、引用の間接化の度合いにも相違が認められる。前者では、「読んでやる」という元発話の話者である千賀の視点が維持されているのに対し、後者では「読んでくれる」が使用され、伝聞情報の受け取り手であるゆかりの視点から情報が捉えられており、間接化の度合いが前者よりも相対的に高いことが指摘できる。

以上をまとめると、「ッテ」「ンダッテ」から「ソウダ」への置換可能性は、「伝言取次ぎ用法」ではかなり低く、「伝聞表示用法」では相対的に高いという傾向が指摘できる。これを「引用」の観点から捉え直すと、「ッテ」は「引用」寄りの性質を色濃くもつものに対し、「ンダッテ」は「伝聞」寄りに位置し、「ソウダ」に近い性質をもつことが指摘可能である。ただし、ノダ文に引用標識の「ッテ」が続き「ンダ+ッテ」という構造に分析可能な「ンダッテ」は、引用寄りに位置するものである。つまり「ンダッテ」は、「伝聞」と「引用」の分岐点の存在を示しながら、その境界を跨いで使用される形式として位置づけることが可能ではないかと思われる。

4. 2. 2 「ノダ」の前接の成否に関与する要因

最後に伝聞表示の「ソウダ」「ッテ」対する「ノダ」の前接の成否に関与する要因について考え

¹⁹ 吉田 (1988) は、ノダ形式が担う表現効果として、《換言》《告白》《教示》《強調》《決意》《命令》《発見》《再認識》《確認》《整調》《客体化》の11種を挙げている。それに基づき解説すれば、「絵本を読んでやるんだ」(《決意》)、「絵本を読んでやりたいんだ」(《告白》)の「んだ」は、それぞれ意志・願望という、発話者個人に帰属する「話し手の直接経験的な認識を聞き手に伝える」という、共通の意味・機能特性を有するものであることが指摘可能である。

ておきたい。

結論を先取りして述べれば、「ソウダ」「ッテ」に前接する「ノダ」は、情報元の話し手に帰属するものではなく、その受け取り手かつその新たな発信者である話し手に帰属すると考えられる。「んですって」における丁寧体「です」の選択が、情報元の話し手ではなく、伝聞情報の伝達者である話し手によるものであるということがその最大の根拠である。

伝聞標識に前接する「ノダ」は、他から受け取った情報を自らの知識に取り込み、それを聞き手に受け渡す際の話し手の伝達態度を表示するもので、後続する「ッテ」「ソウダ」は、それが他の情報元から話し手が得たものであることを表示する。

「ノダ」は上記の特性をもつため、受け取ったばかりの伝聞情報の伝達は、通常「ノダ」を伴わない「ソウダ」「ッテ」で示される。一方、話し手の知識に取り込まれ定着した伝聞情報の伝達には、「ノダソウダ」「ンダッテ」の使用が自然となる²⁰。まず、「ノダ」の前接が不可能な例を以下に挙げる。

(11) ミ ナ [電話を切り]「今、坂野さん宅、通過したそうです!／*ンダソウデス!」

(第5話 p. 269)

(12) 正 一「おーい! 受かった! 受かったってよ~!!／*ンダッテよ~!!」

(= (4)再掲)

(11)は、東京の私立中学に進学した剛洋が初めての夏休みに帰郷した際、そのサプライズパーティを企画している島の人々が到着後の剛洋の移動地点を報告し合っている場面である。(12)は、剛洋が東京の難関私立中学に合格したという連絡を受けた正一が自分の家族にその報告を行う場面である。どちらも発話時に取得したばかりの新しい情報を報告するもので、「ノダ」の使用は極めて不自然で容認不可能である(／の後の片仮名表記の伝聞形式につけた*でそれを示す)。

次は「ノダ」が使用されない例が完全に容認不可能というほどではないが、「ノダ」を使用したほうが自然なケースである(?の数で不自然さの度合いを示す)。(13)はコトーが剛洋に昔この島にいた医師の話を語る場面である。医師の生涯はコトーの知識の中に定着している情報であり、「ノダ」の使用が自然なケースである。

(13) コトー「その頃はまだ、車も自転車もなくて、その先生は、たったひとりでこの山を越えて、往診したんだって／??ッテ」

剛 洋「……」

コトー「戦争中も、戦争が終わってからも……。島の人たちのために島に残って、この島で生涯を終えたんだそうだ／?ソウダ」(第6話 p. 367)

「ノダ」の使用・不使用の決定には複雑な要因が絡み、文脈の読み込み次第で判断が一変してしまうことがある。現時点ではこの問題に対する検討が不十分なため、ここでは上記の例を挙げるにとどめ、掘り下げた考察は今後の課題にしたい。

²⁰ 安田(2017)は関連性理論を援用し、ノダの本質的機能とその諸用法に対する統一的説明を試みたものだが、その結論として次の2点を挙げている(p. 107)。

・ノダ表現の内容は何らかの認知主体における事柄の捉え方(信念や意志)である。

・ノダ表現の内容は発話時点の話し手の判断以外に帰せられる。

そしてノダ表現がソウダに内包される場合(ノダソウダ)、およびソウダがノダに内包される場合(ソウナノダ)についても簡潔な説明を行っており、本稿の考察にとっても参考になる。

5. おわりに

最後に本稿の考察結果をまとめ、残る課題を指摘しておきたい。

まず、小西（2011）の「伝聞」と「引用」の連続性の仮説に対する暫定的な検討結果だが、2つは連続するかに見えて分岐点が存在するというのが当面の結論である。それを端的に示すのが「伝言取次ぎ用法」と「伝聞情報表示用法」における伝聞内容の質的相違や「ソウダ」への置換の成否にみられる差異であった。

また、〔(ンダ)ッテ〕を〔ソウダ〕の口語的代替形とする小西（2011）の説明の妥当性に対しては、紙幅の制約で紹介や検討ができなかったが、伝聞形式の選択に文体と媒体が関与するという小西の指摘に対しては、「発話キャラクタ」という、いっそう具体的・重層的な要因を考慮した分析が有効ではないかと考えている。こうした観点を導入しての分析は続編で試みる予定である。

日本語における「伝聞」と「引用」の概念規定やその境界の確定は極めて困難な課題だが、その見極めにより非常に興味深い事実が見えてくるという予感が筆者にはある。引き続きこの課題に取り組み研究を深めていきたいと思う。

参考文献

- 伊集院郁子・高野愛子（2020）『日本語を学ぶ人のためのアカデミック・ライティング講座』アスク
- 岩男考哲（2003）「引用文の性質から見た発話「～ッテ。」について」『日本語文法』3(2): 146-162
- 岩男考哲（2005）『日本語引用形式の諸相—「ッテ」を中心に—』大阪大学言語文化研究科博士論文
- 加藤陽子（2010）『話し言葉における引用表現—引用標識に注目して—』くろしお出版
- 鎌田 修（1988）「日本語の伝達表現」『日本語学』7(9): 59-72 明治書院
- 鎌田三千子・仁科浩美（2014）『アカデミック・ライティングのためのパラフレーズ練習』スリーエーネットワーク
- 小西 円（2011）「使用傾向を記述する—伝聞の〔ソウダ〕を例に—」森篤嗣・庵功雄編『日本語教育 文法のための多様なアプローチ』159-181 ひつじ書房
- 三枝令子（1997）「「って」の体系」『言語文化』34: 25-38 一橋大学
- 三枝令子（2015）『語形から意味へ 機能中心主義へのアンチテーゼ』くろしお出版
- 定延利之（2020）『コミュニケーションと言語におけるキャラ』三省堂
- 渋谷勝己（2011）「山形市方言における引用・伝聞形式のテとド」『阪大社会言語学研究ノート』9: 1-13
- 砂川有里子（2003）「話法による主観表現」北原保雄（監修・編）『朝倉日本語講座 5 文法 I』128-156 朝倉書店
- 寺村秀夫（1984）『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版
- 中島孝幸（1992）「不確かな伝達—ソウダとラシイ—」『三重大学日本語日本文学』3: 15-24
- 中俣尚己（2014）「伝聞の「そうだ」の伝えるもの—機能語と実質語のコロケーション研究—」『京都教育大学国文学会誌』41: 114-130
- 仁田義雄（1992）「判断から発話・伝達へ—伝聞・婉曲の表現を中心に—」『日本語教育』77: 1-13
- 蓮沼昭子（2015）「終助詞「さ」の本質的機能—認識的モダリティとの共起関係に着目して—」『日本語日本文学』25: 1-27 創価大学日本語日本文学会
- 蓮沼昭子（2016）「〔ソウダ〕と〔ンダッテ〕—伝聞と引用の間—」『日本語教育連絡会議（2015）論文集』Vol.28: 23-35

- 許 夏玲 (1999) 「文末の「って」の意味と談話機能」『日本語教育』 101: 81-99
- 藤田保幸 (2003) 「伝聞研究のこれまでとこれから」『言語』 32(7): 22-28 大修館書店
- 堀口純子 (1995) 「会話における引用の「～って」による終結について」『日本語教育』 85: 12-24
- 森山卓郎 (1995) 「「伝聞」考」『京都教育大学国文学会誌』 26: 25-36
- 安田崇裕 (2017) 『ノダの本質的機能に基づく諸形式の統一的分析』 北海道大学博士論文
- 山崎 誠 (1996) 「引用・伝聞の「って」の用法」『国立国語研究所研究報告集』 17: 1-22 秀英出版
- 吉田茂晃 (1988) 「ノダ形式の構造と表現効果」『国文論叢』 15: 46-55 神戸大文学部国語国文学会
- Aikhenvald, Alexandra Y. (ed.) (2018) *The Oxford Handbook of Evidentiality*. Oxford: Oxford University Press.
- Aikhenvald, Alexandra Y. (2018) Chapter 1 Evidentiality: The framework. [In] Aikhenvald (ed.) 1-43.
- Narrog, Heiko and Wenjiang Yang (2018) Evidentiality in Japanese. [In] Aikhenvald (ed.) 709-724.

調査資料

[コーパス]

国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス』 (BCCWJ) (中納言 2.7.2 データバージョン 2021.03)

[シナリオ]

吉田紀子 (2014) 『Dr.コトー診療所 2006』 (電子書籍版) 小学館 底本の初版 (2007)